

単純過去記号素との共起における 完了アスペクト記号素の対立の中和

—— 「ディスクール」と「イストワール」の弁別の外側にある原完了アスペクト記号素 ——

川 島 浩 一 郎*

0 はじめに

複合過去の動詞形は、BENVENISTE (1966) によれば、ディスクール（話、談話）を特徴づける。つまり複合過去記号素の実現形の使用は、当該の発話がディスクールであることの指標である。単純過去記号素については、逆に、その不使用がディスクールの指標となる。

一方、単純過去の動詞形の使用はイストワール（歴史、物語）を特徴づける。つまり単純過去記号素の実現形の使用は、当該の発話がイストワールであることの指標である。複合過去記号素については、逆に、その不使用がイストワールの指標となる。

(1) Dès qu'elle *eut refermé* la porte, Fernstein décrocha le téléphone.

(Marc Levy, *Vous revoir*, Collection Pocket, 2005, p.173)

(2) Quand il *eut vidé* sa bouteille, il observa Annabel. (Maxime Chat-

tam, *In tenebris*, Collection Pocket, 2002, p.138)

いわゆる前過去の動詞形には、複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形が含まれているかのように見える。たとえば (1) の *eut refermé* は、

* 福岡大学人文学部教授

複合過去の動詞形である *a refermé* の *a* を単純過去の動詞形である *eut* と入れ換えた「かたち」をもつ。同様に (2) の *eut vidé* は、*a vidé* の *a* を *eut* と入れ換えた「かたち」をしている。この観察を出発点にすれば、前過去の動詞形には、ディスクールの指標（複合過去記号素の実現形）とイストワールの指標（単純過去記号素の実現形）が共存していることになる。

しかし実際には、前過去の動詞形に、複合過去記号素の実現形は含まれていない。表意単位とその実現形は、一般に、一対一に対応しないのである。なお前過去の動詞形には、単純過去記号素の実現形は含まれると考えられる。

本稿では、単純過去記号素との共起において、複合過去記号素と単純過去記号素の完了アスペクト記号素としての対立が中和することを示す。前過去の動詞形に含まれる（単純過去記号素の実現形ではないほうの）完了アスペクト記号素の実現形は、複合過去記号素の実現形でもなければ単純過去記号素の実現形でもない。それは、原完了アスペクト記号素（複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分）の実現形にほかならない。原完了アスペクト記号素は複合過去記号素と単純過去記号素の対立の外側、言い換えればディスクールとイストワールの弁別の外側にあると言ってよい。

1 表意単位の対立とその中和

1.1 表意単位の対立

1.1.1 表意単位の實現形としての認定基準（必要条件）

発話のある切片が表意単位の實現形であるためには、少なくとも次の2条件がみたされることが必要である。条件 (a-1) 発話の一部分において、その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる。条件 (b) この入れ換えによって、発話の知的意味に弁別が生じる。知的意味という用語は、大略、言語共同体において共有される客観的、離散的な弁別にもとづく意味のことを指す。たとえば、(3) と (4) では *chou* と *en retard* を入れ換えるこ

とができる。つまり *chou* と *en retard* が条件 (a-1) をみたす。また *chou* と *en retard* の入れ換えによって、(3) や (4) の意味に客観的、離散的な弁別が生じる。つまり *chou* と *en retard* が条件 (b) をみたす。したがって *chou* と *en retard* はそれぞれ、(3) や (4) において、表意単位の実現形として認定されるための必要条件をみたしていると考えてよい。

(3) [...], vous êtes *chou*, [...] (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Terminus*, Collection Folio, 1980, p.155)

(4) Vous êtes *en retard*, [...].(Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.163)

(5) Vous êtes *très en retard*. (Fred Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.223)

最小の表意単位は、記号素と呼ばれる。記号素は、それ以上小さな表意単位に分節ができない表意単位である。つまり記号素の実現形の内部において上記の基準をみたす切片は、その記号素の実現形の全体しかない。たとえば (3) の *chou* の内部で条件 (a-1) と条件 (b) をみたす切片は、この *chou* の全体だけである。よって (3) の *chou* は記号素 (最小の表意単位) の実現形であると言ってよい。

条件 (a-1) と条件 (b) に依拠しないかぎり、発話の任意の切片が表意単位の実現形であるのかそうでないのかを明確に判定する手段はない。条件 (a-1) に反して、かりに (4) の *en* も *retard* も、他の切片との入れ換えができないと仮定しよう。この仮定は、(4) の *en* と *retard* が一体化して分離不可能であることを意味する。つまり *en* も *retard* も、*enfant* における *en* や *fant* がそうであるように、記号素 (最小の表意単位) の実現形の一部分に過ぎないことになる。また条件 (b) に反し、(4) の *retard* を他の切片と入れ換えることはできるが、この入れ換えによって (4) の知的意味に弁別は生じないと仮定しよう。この仮定のもとでの *retard* を、表意単位の実現形と言うことは

できない。どのような実現形を用いても（たとえば *retard* であろうが *bas* であろうが *colère* であろうが）発話の知的意味に弁別が生じない文脈は、表意機能が働きえない文脈にほかならないからである。

入れ換えの可能性が検証の対象となる切片には、いわゆる「ゼロ切片」も含まれる。ゼロ切片という用語は、切片が不在の状態を指す。たとえば（４）にみられるように、（５）の *très* はゼロ切片と入れ換えることができる。また、この入れ換えによって（５）の知的意味に弁別が生じる。この観察によって、（５）の *très* を表意単位の実現形として認定することができる。

1.1.2 表意単位の「対立」を認定するための基準

ある文脈で次の２条件をみたす表意単位の複数の実現形（X, Y と記号化する）は、その文脈において対立すると言われる。条件（a-2）X, Y を、発話の一部分において入れ換えることができる。条件（b）この入れ換えによって、発話の知的意味に弁別が生じる。たとえば（６）の *biologiste* と（７）の *américaine* は、互いに入れ換えることができる。つまり *biologiste* と *américaine* が条件（a-2）をみたす。そして、*biologiste* と *américaine* を入れ換えることによって（６）と（７）の知的意味に弁別が生じる。つまり *biologiste* と *américaine* が条件（b）をみたす。したがって（６）の *biologiste* と（７）の *américaine* は、当該文脈（*elle est ...*）において対立すると言ってよい。

（６） Elle est *biologiste*, [...].(Agathe Hochberg, *Mes amies, mes amours, mais encore ?*, Collection Pocket, 2005, p.23)

（７） Elle est *américaine*, [...].(Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.13)

（８） *Ce pauvre Fred !* (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.73)

（９） *Ce n'est pas bien.* (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*,

Collection Le Livre de Poche, 2006, p.619)

(10) *Cependant, elle n'était pas faite pour la lutte ; [...].* (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.115)

X, Yが対立するのに対立しないのかについては, 文脈ごとの個別の検証が必要である。ある文脈で対立するX, Yが, 別の文脈でも対立するとはかぎらない(1.2.2と1.3.1を参照)。たとえば(8)において指示形容詞記号素の実現形であるceという切片は, 別の文脈では何らかの固有名詞記号素の実現形かもしれない。(9)のceは, 代名詞記号素の実現形と考えることができる。また(10)のceは, *cependant*の冒頭部分にすぎない。表意単位とその実現形は, 一対一に対応しないのである(1.2.1を参照)。指示形容詞記号素の実現形であるceには, それが定冠詞記号素の実現形や不定詞記号素の実現形と対立する文脈がある。しかし*cependant*の内部にあるceが, 定冠詞記号素の実現形や不定詞記号素の実現形と対立する文脈は存在しない。

1.2 異なる表意単位の実現形であることを検証する基準

1.2.1 表意単位と実現形の非一対一対応

表意単位とその実現形のあいだに, 一対一対応の関係はない。声の大きさ, 話す速さ, 男女差, 年齢差, 地域差, 個人差などの音声面でのあらゆる違いに着目すれば, 同一の表意単位の実現形は無数に存在する。異音同義や同音異義の事例も少なくない。たとえば(11)の*paie*と(12)の*paye*のように, 同一の表意単位が異なる実現形をもつことがある(1.2.3を参照)。また代名詞記号素の実現形である(13)の*personne*と普通名詞記号素の実現形である(14)の*personne*のように, 異なる表意単位が(音声的な微細な違いを除けば)同じ「かたち」で実現することも珍しいことではない。

(11) *Je te paie un verre ?* (Fred Vargas, *Pars vite et reviens tard*, Collection J'ai lu, 2001, p.11)

- (12) Je te *paye* un repas chaud ? (Guillaume Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p.38)
- (13) *Personne* n'est parfait ! (Françoise Dorin, *La rêve-party*, Collection Pocket, 2002, p.66)
- (14) L'amour consiste à inventer la *personne* que l'on aime, avant de la connaître. (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p.205)

したがって表意単位の実現形が複数、任意に与えられたとき、それらが同一の表意単位の実現形であるのか異なる表意単位の実現形であるのかを判定する基準が必要である。その基準なしには、(11) の *paie* と (12) の *paye* を異なる表意単位の実現形だとすることも、(13) の *personne* と (14) の *personne* を同一の表意単位の実現形とすることも、明確な根拠なしにできてしまうことになる。

1.2.2 実現形のあいだに対立がある文脈

表意単位の複数の実現形 (X, Y と記号化する) が対立する文脈において、それらは異なる表意単位の実現形である。つまり X, Y が次の 2 条件をみたす文脈があれば、X と Y を当該文脈において異なる表意単位の実現形であるとみなしてよい。条件 (a-2) X, Y を、発話の一部分において入れ換えることができる。条件 (b) この入れ換えによって、発話の知的意味に弁別が生じる。たとえば (15) の *moche* と (16) の *bien* は、当該脈において対立する (1.1.2 を参照)。したがって *moche* と *bien* は、少なくとも当該文脈において、異なる表意単位の実現形と考えてよい。

- (15) C'est *moche* ! (*Elle*, 11 avril 2005, p.76)
- (16) [...], c'est *bien*. (Marc Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.75)

- (17) *Combien avez-vous de voitures ?* (Fred Vargas, *Dans les bois éternels*, Collection J'ai lu, 2006, p.126)

ある文脈で対立する X と Y が、他の文脈でも対立するとはかぎらない。たとえば (15) の *moche* と (16) の *bien* は、*c'est ...* という文脈において対立する。しかし (17) の *bien* は、*moche* と対立しない。表意単位の複数の実現形が対立するのに対立しないのかについては、文脈ごとの個別の検証が必要である (1.1.2 と 1.3.1 を参照)。

1.2.3 実現形のあいだに対立がない文脈

X, Y が条件 (a-2) をみたすが条件 (b) はみたさない文脈において、X と Y は同一の表意単位の実現形である。これらは、自由変異体 (発話の一部分において入れ換えることのできる変異体) の関係にあると言われる。たとえば (18) の *asseyez-vous* の *asseyez* と (19) の *assoyez-vous* の *assoyez* のように、*asseyez* と *assoyez* を入れ換えても発話の知的意味に弁別が生じない文脈にあっては、*asseyez* と *assoyez* を同じ表意単位の実現形であると考えざるをえない (1.2.1 を参照)。

- (18) *Heu... Entrez, asseyez-vous...* (Tonino Benacquista, *Trois carrés rouges sur fond noir*, Collection Folio, 1990, p.77)

- (19) *Entrez, entrez... Assoyez-vous...* (Anna Gavaldà, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.407)

X, Y が条件 (a-2) をみたさない文脈においては、X と Y を異なる表意単位の実現形であると言うことができない。ある文脈で X と Y を入れ換えることができるためには、その文脈に X, Y の両方が現れる可能性が必要である。X, Y のどちらも現れえない文脈では、X と Y の同一性や非同源性ははじめから問題とならない。存在しない X を存在しない Y と比較しても意味がないからである。また X, Y のうちの一方だけしか現れえない文脈においても、X と Y の

同一性や非同源性は問題となりえない。このような文脈には、比較対象となる X（あるいは Y）が存在しないからである。文脈の一部分で互に入れ換えることのできない実現形、たとえば *le coq* の *le* と *une poule* の *une* について、それらを異なる表意単位の実現形であると言うためには、特定の文脈を離れてメタ言語的な観点にたつ必要がある。

1.3 表意単位の対立の中和

1.3.1 機能的共通部分を備えた実現形が現れる対立の解消

ある文脈で存在する対立が別の文脈で消失する現象を「対立の解消」と呼ぶことにしよう。一方に X, Y（表意単位の実現形）が対立する文脈があり、他方に X, Y が対立しない文脈があるとする（1.1.2 を参照）。このとき前者の文脈で存在した X, Y の対立は、後者の文脈で「解消」していると考えることができる。後者の文脈で存在しない X, Y の対立が、前者の文脈で「出現」と考えてもよい。いずれにせよ、X, Y が対立する文脈と対立しない文脈があるという事実にかわりはない（1.2.2 と 1.2.3 を参照）。なお X, Y が対立する（あるいは対立しない）文脈においては、X と Y を実現形とする表意単位もまた対立する（あるいは対立しない）と言われる。

他の文脈で対立する X, Y の機能的な共通部分を備えた実現形が現れうるが、それらの実現形の間に対立が成立しない文脈が存在するとき、後者の文脈において、X, Y を実現形とする表意単位の対立は中和すると言われる¹。つまり中和は「対立の解消」の下位概念である。X, Y の機能的な共通部分を備えた複数の実現形が互に対立しうる文脈（つまり X, Y を実現形とする表意単位が対立しうる文脈）にあっては、これらの対立する実現形が異なる表意単位の実現形とみなされる（1.2.2 を参照）。一方、X と Y の機能的な共通部分を備え

¹ 中和の定義についての詳細は、たとえば MARTINET (1968) や AKAMATSU (1988) を参照。

たすべての実現形が互いに対立しない文脈（つまり X, Y を実現形とする表意単位の対立に中和が生じる文脈）では、それらの実現形を異なる表意単位の実現形と言うことができない（1.2.3 を参照）。なお X, Y の機能的な共通部分を備えた実現形のあいだの相違は、単なる音声面での微細な違いであってもよい（1.2.1 を参照）。

1.3.2 対立の中和が成立するための前提要件：排他的連関

X, Y を実現形とする表意単位の対立に中和が成立するには、その前提として、X と Y が次の 3 条件をみたす必要がある。条件 (I) X, Y が対立する文脈が存在する。条件 (II) X, Y に機能的な共通部分がある。条件 (III) その機能的な共通部分をもつのが、X と Y だけである。条件 (I), (II), (III) をみたす言語単位の複数の実現形は、排他的連関 (*rapport exclusif*) にあると言われる。

X, Y が対立する事例がなければ、X, Y を実現形とする表意単位の対立が中和することもない。中和すべき対立が、存在しないことになるからである。X, Y を実現形とする表意単位に対立の中和が成立するためには、X, Y が対立する文脈と、X, Y が対立しない文脈の両方が必要である（1.3.1 を参照）。つまり前提条件 (I) がみたされなければならない。

X, Y に機能的な共通部分がなければ「X と Y の機能的な共通部分を備えた実現形が現れる」という中和が成立するための一要件がみたされないことになる。X, Y に機能的共通部分があることは、中和の定義の一部分と考えてよい（1.3.1 を参照）。つまり前提条件 (II) がみたされなければならない。

X, Y 以外に条件 (I) と条件 (II) をみたす別の Z がある場合、X, Y を実現形とする表意単位の対立だけが中和するような文脈は存在しえない。対立が中和する文脈があるとすれば、その中和は X, Y を実現形とする表意単位の対立の中和ではなく、X, Y, Z を実現形とする表意単位の対立の中和である。中

和の定義によれば、この文脈にあってはZもまたX, Yと対立しない(1.3.1を参照)。X, Y, ZではなくX, Yを実現形とする表意単位の対立の中和だと主張する場合、当該文脈でZがXあるいはYと対立することが想定されているはずである。しかし、この想定は、それがX, Y, Zを実現形とする表意単位の対立の中和であることと矛盾する。このような矛盾を生じさせないためには、前提条件(III)がみたされなければならない。

1.3.3 機能的共通部分の実現形

表意単位の複数の実現形(X, Yと記号化する)のあいだに対立のない文脈にあっては、これらの実現形を異なる表意単位の実現形だと言うことができない。ある文脈においてX, Yが異なる表意単位の実現形であるためには、当該文脈においてX, Yが対立することが必要だからである(1.2.2を参照)。よってX, Yを実現形とする表意単位の対立が中和する文脈にあっては、X, Yを異なる表意単位の実現形とみなすことができないことになる(1.2.3を参照)。

したがって、X, Yに機能的共通部分が存在する場合、X, Yを実現形とする表意単位の対立が中和した結果として現れる(X, Yの機能的共通部分を備えた)実現形は、X, Yの機能的共通部分の実現形であると考えざるをえない。機能的共通部分があるX, Yを異なる表意単位の実現形であると「言えない」ためには、X, Yがどちらも、この機能的共通部分の実現形でなければならない。X, Yの少なくともどちらか一方に(X, Yが共有していない)機能的な非共通部分が含まれていれば、これらのX, Yを異なる表意単位の実現形と「みなさない」ことは不可能だからである。

2 複合過去記号素および単純過去記号素について

2.1 複合過去記号素と単純過去記号素の存在

複合過去の動詞形には、複合過去記号素の実現形が含まれる。たとえば(20)

の *as eu* と (21) の *as* を比べれば、*as* にはない表意単位の実現形が *as eu* に含まれていることは明らかである。複合過去の動詞形を特徴づけるこの切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす (1.1.1 を参照)。つまり複合過去の動詞形を特徴づける切片は、(21) の *as* にみられるように、他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。また、その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる。この切片は、記号素の実現形と考えられる。複合過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである。

(20) Tu *as eu* du monde ce matin ? (Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.56)

(21) Tu *as* du monde ? (Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.281)

(22) Elle *raccrocha*. (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Le Livre de Poche, 1959, p.42)

(23) Elle *raccroche*. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.143)

単純過去の動詞形には、単純過去記号素の実現形が含まれる。(22) の *raccrocha* と (23) の *raccroche* を比べれば、*raccroche* にはない表意単位の実現形が *raccrocha* に含まれていることは明らかである。単純過去の動詞形を特徴づけるこの切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす (1.1.1 を参照)。つまり単純過去形を特徴づける切片は、(23) の *raccroche* にみられるように、他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができ、その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる。この切片は、記号素の実現形と考えられる。単純過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである。

2.2 複合過去記号素：時間的な位置づけをもたない完了アスペクト記号素

複合過去記号素は、完了アスペクト記号素のひとつである。複合過去記号素

とは、複合過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする表意単位のことである（2.1を参照）。たとえば（24）の *le juge Fulgence est mort*, （25）の *le juge est mort*, （26）の *on est mort* そして（27）の *ce qu'on a semé* における複合過去記号素の実現形はいずれも、事態が完了していることを明示する。実際、これらを未完了の事態として解釈することはできない。複合過去記号素は、事態の完了を明示することに特化した純粋な完了アスペクト記号素である。

(24) *Le juge Fulgence est mort il y a seize ans !* (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.93)

(25) [...], *le juge est mort* depuis seize ans. (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.74)

(26) *On est mort* de toute façon, si on reste là. (Maxime Chattam, *La théorie Gaïa*, Collection Pocket, 2008, p.449)

(27) *La vérité, c'est qu'on ne récolte que ce qu'on a semé.* (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.129)

複合過去記号素は、時制記号素ではなくアスペクト記号素であるため、それが表現する事態の時間的な位置づけを特定する表意機能をもっていない。（24）の *le juge Fulgence est mort* で表された事態の成立は、過去時間に位置づけられている。（25）の *le juge est mort* は、現在時間に位置づけられている。（26）の *on est mort* によって表される事態は、未来時間に位置づけられている。そして（27）の *ce qu'on a semé* で表された事態の成立は、過去時間、現在時間、未来時間のいずれにも特定されない。完了アスペクト記号素である複合過去記号素の使用は、時間的な位置づけによる制約を受けないのである。

2.3 単純過去記号素：過去時間にのみ適用される完了アスペクト記号素

単純過去記号素は、事態の完了を標示する。単純過去記号素とは、単純過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする表意単位のことである（2.1

を参照)。たとえば、単純過去記号素の実現形を含む (28) の *on essaya ...* を、未完了の事態として解釈することは不可能である。(28) から単純過去記号素の実現形を除去した *on essaie ...* には、未完了の事態としての解釈がありうる(これから試みるところだ、試みている最中だ、などの解釈)。一方、*on essaya ...* にはその可能性がない。単純過去記号素は、事態の完了と常に結び付いているのである。

(28) *On essaya d'ouvrir la porte.* (Georges Simenon, *L'évadé*, Collection Folio, 1936, p.47)

単純過去記号素は、それが表現する事態を常に過去時間に位置づける。単純過去記号素の実現形を用いて表現した事態は、現実世界においても物語世界においても、過去時間に属するものとして位置づけられることになる。たとえば (28) の *on essaya ...* は、それが現実世界の出来事であるか物語世界の出来事であるかにかかわらず、少なくとも現在時間や未来時間の事態ではありえない。単純過去記号素の使用は、事態の過去性と常に結び付いている。

以上より、単純過去記号素は、過去時間にしか適用されない完了アスペクト記号素とみなしてよいことになる。単純過去記号素においては、過去時制であることと完了アスペクトであることのあいだに弁別がない。単純過去記号素はいわば「過去時間にしか適用されない完了アスペクト記号素」であることと「事態の完了を含意した過去時制記号素」であることが、両立する記号素なのである²。

2.4 複合過去記号素と単純過去記号素の対立と排他的連関

複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形には、それらが対立する文脈が存在する。したがって、複合過去記号素と単純過去記号素が対立する文

² 単純過去記号素の表意機能的なステイタスについての詳細は、川島 (2014) を参照。

脈が存在する。たとえば (29) の *j'ai compris* に含まれる複合過去記号素の実現形と (30) の *je compris* に含まれる単純過去記号素の実現形は互いに入れ換えることができ、この入れ換えによって、それぞれの発話の知的意味に弁別が生じる (1.1.2 を参照)。したがって (29) や (30) は、複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形が対立する文脈であると言ってよい。また、たとえば (31) の *il a eu fini* と (32) の *il eut fini* にみられるように重複合過去の動詞形と前過去の動詞形においても、複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形は互いに入れ換えることができ、この入れ換えによって、それぞれの発話の知的意味に弁別が生じる。よって前過去や重複合過去の動詞形は、複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形が対立する文脈であると考えてよい。

(29) *J'ai compris*. (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.75)

(30) [...], *je compris* : [...]. (Amélie Nothomb, *Journal d'hirondelle*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.11)

(31) Quand *il a eu fini*, *je l'ai montré du doigt*. (Philippe Djian, *37°2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.301)

(32) [...], lorsque Arthur *eut fini* son récit, *il se leva du fauteil et toisa son interlocuteur*. (Marc Levy, *Et si c'était vrai...*, Collection Pocket, 2000, p.234)

複合過去記号素と単純過去記号素には、機能的な共通部分がある。複合過去記号素は、事態が完了していることを標示するだけの純粋な完了アスペクト記号素である (2.2 を参照)。単純過去記号素は、過去時間にしか適用されない完了アスペクト記号素である (2.3 を参照)。つまり複合過去記号素と単純過去記号素は、完了アスペクト記号素であることを機能的に共有する。

完了アスペクト記号素であるという機能的共通部分を持ち、互いに対立する

記号素は、複合過去記号素と単純過去記号素だけである。前過去の動詞形は、単純過去記号素の実現形と完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。大過去の動詞形は、過去時制記号素の実現形と完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。前未来の動詞形は、単純未来記号素の実現形と完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。接続法過去の動詞形は、接続法記号素の実現形と完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。重複合過去の動詞形は、ふたつの完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。条件法過去の動詞形は、過去時制記号素の実現形、単純未来記号素の実現形、完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。完了アスペクト記号素として認定できる（連辞ではなく）記号素は、複合過去記号素と単純過去記号素しかない。

以上より、複合過去記号素と単純過去記号素は、それらの対立に中和が成立するための前提条件をみたしていると考えてよい。複合過去記号素と単純過去記号素には、それらに対立する文脈がある。そして複合過去記号素と単純過去記号素は、排他的連関の関係にある（1.3.2を参照）。

3 過去時制記号素との共起における複合過去記号素と単純過去記号素の対立の中和

3.1 前過去の動詞形における完了アスペクト記号素と過去時制記号素の実現形

前過去の動詞形には、単純過去の動詞形にはない記号素の実現形が含まれる。たとえば (33) の *eut réussi* という動詞形には、(34) の *réussit* にはない切片が含まれる。この切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす（1.1.1を参照）。つまり他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができ、その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる。この切片の内部には、それ以上小さな表意単位の実現形は含まれない。それが記号素の実現形だからである。

(33) Quand il *eut réussi* à se dégager, il se heurta presque à Gévine et

à sa femme. (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Sueurs froides*, Collection Folio, 1958, p.32)

(34) Elle *réussit* néanmoins à rassembler suffisamment de courage pour parler, [...]. (Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.494)

(35) Craig Nova *a réussi* à déchiffrer quelques pages du carnet que tu as trouvé hier soir. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.307)

この実現形は、完了アスペクト記号素の実現形だと考えられる。前過去の動詞形は、他の単純過去の動詞形によって表現された事態の直前に完了した事態を表わすことができるからである。よって (33) の *eut réussi* には、何らかの完了アスペクト記号素の実現形が含まれていると言ってよい (2.1 と 2.2 を参照)。

前過去の動詞形には、複合過去の動詞形にはない記号素の実現形が含まれる。たとえば (33) の *eut réussi* という動詞形には、(35) の *a réussi* には含まれていない切片が含まれる。この切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす (1.1.1 を参照)。すなわち、他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができ、その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる。この切片の内部には、それ以上小さな表意単位の実現形は含まれない。それが記号素の実現形だからである。

この実現形は、単純過去記号素の実現形だと考えられる。複合過去の動詞形と異なり、前過去の動詞形は過去時間に属する事態にしか対応ができないからである。よって (33) の *eut réussi* には、単純過去記号素の実現形が含まれていると言ってよい (2.1 と 2.3 を参照)。

以上の分析により、前過去の動詞形には完了アスペクト記号素の実現形と単純過去記号素の実現形が含まれると考えられる。この分析は、前過去の動詞形

の「かたち」とよく合致してもいる。前過去の動詞形は、複合過去形の一部を単純過去の動詞形と入れ換えた「かたち」をしているからである (0を参照)。

3.2 前過去の動詞形における完了アスペクト記号素の対立の中和

同一の動詞形において、単純過去記号素と共起することのできる完了アスペクト記号素は、ひとつしかない。たとえば (36) の *eut soufflé* や (37) の *eut sonné* のような前過去の動詞形において、単純過去記号素と共起する完了アスペクト記号素は存在する。前過去の動詞形には、完了アスペクト記号素の実現形と単純過去記号素の実現形が含まれると考えてよい (3.1を参照)。ただし前過去の動詞形に含まれる (単純過去記号素の実現形ではないほうの) 完了アスペクト記号素の実現形を、他の完了アスペクト記号素の実現形と入れ換えることは不可能である。そこに現れうる完了アスペクト記号素は、ひとつしかないからである。

(36) Je restai ainsi après qu'il *eut soufflé* l'allumette. (Sébastien Japrisot, *La passion des femmes*, Collection Folio, 1986, p.193)

(37) Peu après que l'horloge *eut sonné* deux heures, j'entendais le portail grincer. (Sébastien Japrisot, *La passion des femmes*, Collection Folio, 1986, p.202)

したがって、単純過去記号素との共起において、複合過去記号素と単純過去記号素の完了アスペクト記号素としての対立は中和する。単純過去記号素と共起することのできる完了アスペクト記号素は、ひとつしかない。よって、当該の文脈において複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形を入れ換えることは不可能である (1.1.2を参照)。当該文脈にあっては、複合過去記号素と単純過去記号素の対立は成立しえないということになる (1.3.1を参照)。なお複合過去記号素と単純過去記号素は、それらの対立に中和が成立するため

の前提条件をみたしている (1.3.2を参照)。

以上の考察から、前過去の動詞形において単純過去記号素の実現形と共起する完了アスペクト記号素の実現形は、複合過去記号素の実現形でもなければ単純過去記号素の実現形でもないと考えざるをえない。複合過去記号素と単純過去記号素の対立が中和する文脈にあっては、このふたつの記号素のあいだに弁別がないからである。複合過去記号素と単純過去記号素のあいだに弁別のない文脈に、単純過去記号素との弁別を含意した複合過去記号素や、複合過去記号素との弁別を含意した単純過去記号素が現れるはずがない (1.3.3を参照)。

3.3 原完了アスペクト記号素：複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分

複合過去記号素と単純過去記号素の対立が中和した文脈に現れることのできる完了アスペクト記号素の実現形は、複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分の実現形にほかならない。複合過去記号素と単純過去記号素には、完了アスペクト記号素であるという機能的な共通部分がある (2.4を参照)。複合過去記号素は、時間的な位置づけをもたない完了アスペクト記号素である (2.2を参照)。単純過去記号素は、過去時間にのみ適用される完了アスペクト記号素である (2.3を参照)。したがって、両者には完了アスペクト記号素であるという機能的な共通部分がある。機能的共通部分をもつ複数の表意単位の対立が中和する文脈に、この機能的共通部分を備えた実現形が現れる場合、その実現形は当該の機能的共通部分の実現形にほかならない (1.3.3を参照)。

音韻対立の中和における「原音素 (archiphonème)」をまねて、複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分を「原完了アスペクト記号素」と呼ぶことにしよう³。複合過去記号素と単純過去記号素はそれぞれ、複合過去記号

³ 原音素という概念についての詳細は、たとえば MARTINET (1968) や AKAMATSU (1988) を参照。

素と単純過去記号素が対立することを前提とする完了アスペクト記号素である (2.4 を参照)。それに対して原完了アスペクト記号素 (複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分) は、複合過去記号素と単純過去記号素の対立を前提としない。いわば、複合過去記号素と単純過去記号素の対立の外側にある完了アスペクト記号素である。

原完了アスペクト記号素は、複合過去記号素でもなければ単純過去記号素でもない。原完了アスペクト記号素の実現形は、複合過去記号素の実現形と異なるとは言えない表意単位の実現形であるだけでなく、単純過去記号素の実現形と異なるとは言えない表意単位の実現形でもある。原完了アスペクト記号素の実現形を複合過去記号素の実現形あるいは単純過去記号素の実現形と入れ換えることができたとしても、そこに知的意味の弁別は生じないからである (1.2.2 と 1.2.3 を参照)。このような実現形をもつ表意単位が、複合過去記号素でもなければ単純過去記号素でもないことは明白である (1.3.3 を参照)。

4 まとめ

複合過去記号素と単純過去記号素の完了アスペクト記号素としての対立は、単純過去記号素との共起において中和する。単純過去記号素と共起可能な完了アスペクト記号素が、ひとつしかないからである。たとえば単純過去記号素の実現形を含む (38) の *eut raccroché* においては (単純過去記号素の実現形ではないほうの) 完了アスペクト記号素の実現形を、他の完了アスペクト記号素の実現形と入れ換えることができない。(39) の *eut déjeuné* についても同様である。なお複合過去記号素と単純過去記号素は、それらの対立に中和が成立するための前提条件をみたしている。

(38) Quand Alan *eut raccroché*, Mary se sentit à nouveau déprimée.

(Dean Ray Koontz, *Miroirs de sang*, Collection Pocket, 1977, p.189)

(39) Ensuite, une fois qu'on *eut déjeuné*, il était temps de rentrer. (Jean

Echenoz, *Je m'en vais*, Minuit, 1999/2001, p.77)

したがって、いわゆる前過去の動詞形に含まれる（単純過去記号素の実現形ではないほうの）完了アスペクト記号素の実現形は、原完了アスペクト記号素（複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分）の実現形である。原完了アスペクト記号素は、複合過去記号素でもなければ単純過去記号素でもない。原完了アスペクト記号素は、いわば複合過去記号素と単純過去記号素の対立の外側、言い換えればディスクールとイストワールの弁別の外側にあると考えてよい。

参考文献

- AKAMATSU, Tsutomu (1988), *The Theory of Neutralization and the Archiphoneme in Functional Phonology*, John Benjamins.
- BENVENISTE, Émile (1966), *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard.
- 川島浩一郎 (2004) 「日本語の促音音素/q/と中和について」『武蔵野美術大学研究紀要』34, 25-32.
- KAWASHIMA, Koichiro (2010), 《Neutralisation en japonais. Une application de la théorie d'André Martinet au Japon》, KLEIN, J.R. & F. THYRION (eds), *Les études françaises au Japon. Tradition et renouveau*, Presses Universitaires de Louvain, 119-126.
- 川島浩一郎 (2014) 「複合過去と単純過去の対立の中和」『ふらんぼー』39, 東京外国語大学フランス語研究室, 45-65.
- 川島浩一郎 (2016) 「過去時制記号素との共起における複合過去記号素と単純過去記号素の対立の中和 — ディスクールとイストワールの弁別と大過去形 —」『福岡大学人文論叢』第48巻第1号, pp. 133-152.
- MARTINET, André (1968), 《Neutralisation et syncrétisme》, *La Linguistique* 4-1, 1-20.
- MARTINET, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier.
- 渡瀬嘉朗 (2012) 『統辞理論の周辺』三修社.
- WEINRICH, Harald (1964/1973), *Le temps — le récit et le commentaire*, Seuil.